

1 ★ 9 ★ 3 ★ 7

辺見庸

(角川文庫 2016) ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆



「觀兵式」文庫（上）（下）卷

❖ 辺見庸（へんみよう）さんは、もと共同通信社のジャーナリスト、そののち作家へ。「もの食う人々」が有名です。

この本のタイトルはイクミナ、と呼びます。文庫版表紙は、山下清さん「観兵式」1937年・貼絵（当時は10代）です。序は、かつて1937年という夢のような時があった・・・1937年は妙に明るかったのだ・・・ではじまります。

【本の解説より抜粋】

❖現在の謎を解くカギは過去にある・・・南京大虐殺はじめ
ニッポンの出自と深層心理を考える上で不可欠な出来事が
相次いだ 1937 年。いままた新たなよそおいで息を吹き返し
つつあるファシズムの指標に 1★9★3★7 を据え、古来より
はびこる、なりゆきまかせと没主体性の神髓を射ぬく…

❖1937年中国で父祖たちはどのように殺し、強姦し、略奪したか。いかに記憶を隠蔽し口をつぐんできたか。自分ならその時どうしたか。父の記憶をたぐり、著者は無数の死者の声なき慟哭と震えに目をこらす。戦争の加害にも被害にも責任をとらず、総員「忘れたふり」という暗黙の了解で空しい疑似的平和を保ってきた戦後ニッポン。その欺瞞と天皇制の闇を容赦なく暴きだします。かつてヒトラーを羨望させたほどのニッポンのファシズム……。桃太郎が軍国少年ヒーローとして語られ、戦意高揚に利用された……。皇軍の「天真らんまん」は桃太郎主義にかくされている……。皇軍南京入城式の風景には、うんざりするほどニッポン的に不気味な心髄がむきだし、高校野球、国体、2020 東京五輪さわぎにだって、この心髄がかいまみえるといいます。「すべてはおためごかし」……。表むきは相手のためになるようにみせかけて、じつはじぶんの利益をはかること。作家の武田泰淳が「従軍手帳」や「審判」でなしえた殺人の告白や、火野葦平、石川達三、魯迅などを取り上げています。

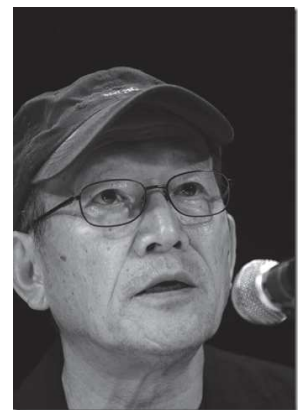
解説（徐京植）では、2015 年の安部首相「戦後 70 年談話」にふれる。「日露戦争は、植民地支配のもとにあった多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました」と述べた。だが事実としては、日露戦争は中国東北地方（満州）の覇権をめぐる戦争であった。自国の犯したこの罪を恥じることもないまま魯迅の中国文学に「感動」したり、それを楽しんだりすることができるのか？と。

❖作家の堀田善衛（ほったよしえ）の「時間」は、殺、掠、姦一。

1937 南京を占領した日本軍。人倫の崩壊した時間。南京事件を中国知識人の視点から、手記のかたちで語った。これが書かれなければならなかった訳を主張しつづける…。

「方丈記私記」では、焼け跡で人々は本当に土下座をして涙を流しながら「陛下、私たちの努力が足りませんでしたので、むざむざと焼いてしまいました、まことに申し訳ない次第でございます、生命をささげまして」と口々に小声でつぶやいていた、と語る。

❖ 日中戦争、このような時勢をただそのまま進行させてはいけないとの想いの具体化と、侵略であることへの批判を込めて、思想上の「古典」（岩波文庫 1927～）から「現代」への転換の契機となり、翌年の 1938 年に「岩波新書」の発刊が始まります。（黒野）



岩波現代文庫／文庫271

時間

堀田善衛

中国人の視点から描く
南京事件



解説：辺見 庸

